

地震なき風土論—関東大震災と和辻哲郎の人間観

関西学院大学 災害復興制度研究所
所長 山泰幸

1. 寺田寅彦と和辻哲郎

東日本大震災から一か月後、宗教学者の山折哲雄が、『西日本新聞』（2011年4月11日夕刊）において、「地震の風土と台風風土」と題して、物理学者の寺田寅彦と哲学者の和辻哲郎を取り上げて論じている。

記事の冒頭で、「私がいま思いおこしているのが寺田寅彦と和辻哲郎の仕事である。なぜかといえば、2人は日本の独自の風土を、数千年という長い単位で考えていたからである。西欧と比較して日本の自然の特質を明らかにしようとした彼らの自然観は、その後の日本人に大きな影響を与えたと思われる。ところが、自然の猛威にたいする2人の考えには大きな相違がみとめられる」と述べる。そのうえで山折は、昭和10年（1935年）前後に寺田寅彦によって書かれた「天災と国防」と「日本人の自然観」というエッセイを取り上げて、次のような点に注目する。「第一、文明が進めば進むほど天然の暴威による災害はその激烈の度を増す。第二、日本は西欧にくらべて地震、津波、台風による脅威の規模がはるかに大きい。第三、そのような経験のなかから、科学は自然にたいする反逆を断念し、自然に順応するための経験的な知識を蓄積することで形成された。そしてそこにこそ日本人の科学や学問の独自性があった」という点、さらに寺田が「日本人の自然への随順、風土への適応という態度のなかに、仏教の無常観と通ずるものを見いだしていた」として、「地震や風水による災害をくぐりぬけることで『天然の無常』という感覚が作りあげられた」とする寺田の主張に注目している。

一方で、山折は、和辻哲郎の著作『風土』を取り上げている。「人間学的考察」という副題をもつ『風土』は、ヨーロッパ留学から帰国した和辻が、昭和3年

（1928年）から4年（1929年）にかけておこなった大学の講義にもとづいて書かれたものとされ、寺田寅彦のエッセイと同じ昭和10年（1935年）に出版されたものである。『風土』は、その序において和辻自身が述べているように、ハイデガーの『存在と時間』に触発をされた和辻が、ハイデガーが人間存在を時間性において捉えたのに対して、人間存在の空間性に着目して考察したものとされる。有名なモンスーン型などの風土の類型は、和辻のヨーロッパに向かう旅の経験に基づくものとされており、和辻個人の感覚的な印象によって論じられている点に対する批判も多い。その一方で、日本人の国民性を世界的な視野から考察し、位置づけようと試みた『風土』は、日本人論の先駆として評価されており、現在まで長く読み継がれている。また近年では、地球環境問題を解決するための発想の手掛かりとして、再評価されている。寺田のエッセイ「日本人の自然観」も和辻の『風土』の影響を受けて書かれたものとされる。

さて、山折は、『風土』について、次のような点に注目する。「日本の台風の風土の特徴は、第一に熱帯的、寒帯的（大雨と大雪）という二重性格を帯び、第二に季節的、突発的（感情の持久と激変）の二重性に規定されているという。そこから、モンスーン的、台風の風土における日本人の受容的、忍従的な生活態度が生み出された」という点、さらに「『しめやかな激情』『戦闘的な恬淡』といった逆説的な国民的性格を日本人がもつようになったのも、台風の風土の二重性に根本的な原因がある」とする和辻の主張に注目している。また、和辻が「感情の二重性格をもとに、仏教における『煩惱即菩提（迷いはすなわち悟り）』という逆説的な思想が日本人に及ぼした影響」に注目し、

これを発展させて「日本の家族の問題、すなわち男女、夫婦、親子の関係のなかに『利己心と犠牲』という対立するテーマ」を見だし、それを解決する規範として「慈悲の道德」が形成されたとする和辻の主張に注目している。

以上のように二人の議論を整理したうえで、日本の風土を考察するにあたって、寺田が「地震的契機」を重視することで「天然の無常」という宗教的な根源感情に関心を寄せたのに対して、和辻の方は、「台風の契機」に着目することで「慈悲の道德」という協同的な市民感覚の重要性に説き及んでいる、と山折はまとめている。東日本大震災を受けて、その年の7月に、寺田の災害関係のエッセイをまとめて、山折が編集した『天災と日本人 寺田寅彦随筆選』(2011)の「解説」においても、山折はほぼ同様の内容を掲載しており、それ以前からも繰り返し、同様の議論をしているようである。

日本の風土を考察するにあたって、寺田と和辻とがそれぞれ「天然の無常」と「慈悲の道德」という対照的な考え方に到達していたことを指摘する、山折の着眼にはたいへん鋭いものがある。しかし、山折の指摘とは異なり、寺田は必ずしも「地震的契機」のみを重視したわけではない。寺田のエッセイを読めばわかるように、地震だけでなく、津波や台風にも言及している。たとえば、「地震津波颱風のごとき……頻繁に我が邦のように劇甚な災禍を及ぼすことははなはだ稀であると言ってもよい」とし(寺田 2011:10)、また「地震や風水の災禍の頻繁でしかもまったく予測しがたい国土に住むものにとっては天然の無常は遠い遠い祖先からの遺伝的記憶となって五臓六腑に浸み渡っている」とも(寺田 2011:135)、「まったく予測し難い地震台風に鞭打たれつづけている日本人」とも述べている(寺田 2011:136)。地震のみならず、自然の猛威全般を前にして、「天然の無常」が祖先からの遺伝的記憶として五臓六腑に浸み渡っていることを指摘しているのである。おそらく、和辻の風土論における「台風の契機」との対比を明確にするために、あ

えて「地震的契機」という表現をして強調しようとしたのであろう。というのも、山折は、先の記事において、次のような指摘をしているからである。

ところが意外なことに、和辻は日本の風土的特徴を考察した際、台風の、モンスーンの風土については論じて、地震的性格については一言半句ふれてはいない。これは驚くべきことではないか。なぜなら 1923 (大正 12) 年に起きたばかりの関東大震災の惨事を記憶していたはずだからである。

たしかに、日本の風土を考察するにあたって、その台風の性格について論じて、その地震的性格については一切ふれていないのは、驚くべきことである。まして、関東大震災を身をもって経験した和辻が、地震について一切ふれていないというのは、さらに驚くべきことだろう。和辻がその風土論において、地震について一切ふれていないということの驚きが、山折をして寺田の議論のなかに「地震的契機」をあえて見出させたと思われる。しかし、すでに述べたように、寺田は自然の猛威全般を取り上げて、「天然の無常」を説いているのである。実際、寺田が述べるように、地震だけではなく、津波や台風などさまざまな自然の猛威が人々に無常を感じさせると説く方が自然のように思われる。

私なりに整理すれば、寺田が「天然の無常」を説くにあたって、自然の猛威全般についてふれているのに対して、和辻は「慈悲の道德」を説くにあたって、自然の猛威全般を台風で代表させて論じているのである。おそらく風土論において、台風を取り上げることがもっともふさわしいと和辻は考えたのであろう。しかし、言い方をかえれば、地震について言及することは、和辻の風土論の立論において、ふさわしくない理由があったのではないだろうか。

地震について一切ふれていない、という山折の指摘は、和辻の風土論の構成を考えるうえで、貴重な手掛かりを与えてくれていると思われる。

2. 和辻哲郎の震災体験

和辻哲郎は、京都帝国大学、東京帝国大学の倫理学講座の主任教授を歴任した、文字通り日本を代表する哲学者であり、倫理学者である。その倫理学は、彼の名を冠して「和辻倫理学」と称されている。和辻倫理学は、原理的研究と歴史的研究の大きく分けて二つの系統の著作から構成され、前者が『人間の学としての倫理学』および『倫理学』上中下3巻にまとめられており、後者が『日本倫理思想史』上下2巻にまとめられている。いずれも、戦前に書かれた論考をもとに、戦前から戦後にかけて出版されたものである。

昭和9年(1934年)に『人間の学としての倫理学』を岩波全書の一冊として刊行する。この年、和辻は京都帝国大学教授から、東京帝国大学教授に転任しており、倫理学者和辻哲郎のデビューを華やかに飾るものとなった。

昭和10年(1935)に刊行された『風土—人間学的考察』は、「人間学的考察」という副題にも表れているように、その前年に出版された『人間の学としての倫理学』の姉妹編とも呼ぶべき作品であり、和辻倫理学の完結版ともいうべき『倫理学』下巻においても風土論が取り込まれているように、『風土』は、和辻の主著ともいうべき作品といえる。では、『風土』において、なぜ地震について一切ふれられていないのだろうか。

じつは、関東大震災を身をもって経験した和辻は、「地異印象記」と題した震災体験記を残しているのである。

倫理学者の川本隆史は、阪神・淡路大震災の一年後に、「震災と倫理学に関するノート」という論考を発表し、和辻哲郎、清水幾太郎、長谷川如是閑、林達夫の関東大震災に対するそれぞれの体験を取り上げている。和辻に関しては、地異印象記を取り上げて考察している。川本はその概要を簡潔に次のように述べている。

当時三十四歳で法政大学教授の職にあった彼は、千

駄ヶ谷の自宅で大地震に出くわし、いち早く『思想』第二五号(1923年11月)に「地異印象記」を発表した。九月末日という日付のあるこの小篇は、地震後の大火の原因を「一切の合理的設備が間に合わない程迅速に、また合理的設備を忘れる程性急に、大都会が膨張して行ったこと……結局はかくの如く一所に蝟集してかくの如き都会を築造した人間の愚」に求める一種の文明批評から説き起こし、結びの部分でも「『大火に対して何の防備もない尨大な都市』を作った市民自身の油断」を戒めたもの。そして和辻は「正しい認識とそれに従う正しい実行」、より具体的には「公共の利益のために断乎として利己主義的な社会組織経済組織を改善する」との施策を提案する(川本1996:112)。

以上のような主張をもった震災体験記である地異印象記は、地震に始まり、大火の発生にともなう被害状況の推移、放火に関する流言蜚語、それに対する和辻自身の行動や心理の変化を、時間の流れを追って、じつに克明に記録したものであり、関東大震災を体験した人間の記録としても貴重なものとなっている。本稿で注目したいのは、地異印象記に表現された和辻の人間観である。和辻は、突如発生した関東地震をきっかけにして、そこに現れた人間の反応に関しても、注意深く観察し、考察を残しているのである。

和辻は地異印象記の冒頭で、「大正十二年ごろ関東地方に大地震がある、ということはある権威ある地震学者が予言したと仮定する。その場合今度のような大災害は避けられたであろうか」と述べる(和辻1963:583)。二、三年前に大本教によって大地震の予言がなされ、人々を幾分不安に陥れたが、人々を地震に対する防備に着手させるほどには信じさせることができなかったことを引き合いに出しながら、「自分は思う、人々は恐らくこの予言にも動かされなかったろうと。なぜなら人間は自分の欲せぬことを信じたがらぬものだから」と述べる(和辻1963:583)。また、「百年に一度というふうな異変に対しては、人々はず

きるだけそれを考えまいとする態度をとる」ものであり、「在来の地震から帰納せられた学説は、この種の信じたがらぬものを信じさせるほどの力は持たない」からである（和辻 1963:583）。「結局学者の予言も大本教の予言と同様に取り扱われたであろう」と述べている（和辻 1963:583）。

和辻は、自分の欲しないことを信じたがらず、百年に一度という異変についてはできるだけ考えまいとする、人間という生き物が抱えている、ある種の傾向を指摘している。この点を捉えて、和辻は「要するに人間は愚かなものである」と述べている（和辻 1963:584）。さらに、「最近の東京は確かに日本人の弱所欠点が凝って一団となった」「結局はかくのごとく一か所に蟻集してかくのごとき都会を築造した人間の愚に突き当たる」と述べているように、人間の愚かさについて指摘を続けていくのである（和辻 1963:584）。

確かに、川本がまとめているように、地異印象記は、「一種の文明批評」から説き起こし、「公共の利益のために断乎として利己主義的な社会組織経済組織を改善する」との施策を提案するものと捉えることができるだろう。しかし、一方で、人間という生き物が本質的に抱えていると和辻自身が考える「弱点」を繰り返し指摘している点において、和辻自身の人間観を語ったものとも捉えることができる。特に、注目したいのは、以下に検討するように、このような人間が抱え持つ弱点のうち、「利己主義的な社会組織経済組織を改善する」という施策によってしても、如何ともしがたい人間の弱点を和辻が見出している点なのである。

3. 人間の本性

地異印象記のなかに、地震によって、自宅が揺れ始めてから、和辻がとった行動について克明に記した箇所がある。

揺り始めると自分は立って縁側に出た。そのとき自分は昨春の強震を思い出して、またあれくらいのが来

たなと思った。そうしてあのときは嬰兒を抱いて庭に飛び出したが、今日は飛び出すのをよそうなどと考えた。その瞬間に家が予想外に猛烈な震動を始めた。自分は「外へ出ろ」と怒鳴って反射的に庭へ飛び下りた（和辻 1963:588）。

これに続けて、「この最初の瞬間の心理状態が自分には今度の事変の経験を図式的に示しているように思われる。最初にはある近い経験にあてはめて考え、その見当が外れたとき度を失ってある反射的な行動に出るのである」と述べて、自らの行動を反省的にとらえて、「度を失ってある反射的な行動に出る」という人間の反応のあり方について冷静に考察している（和辻 1963:588）。和辻は続けて、まだ女中と子が家の中に残されていることに気づき、全員を避難させるまでの経緯を詳しく描写した後、次のように記している。

家が倒れなかったからよかったようなものの、もし倒れたとしたら、その時家の中にいたのは二人の女中と下の子とで、自分たち夫婦と上の子とは外に逃げ出していたのである。もっともその際誰が押し潰されたかは解らない。あるいは外にいたものの方がひどい怪我をしたかも知れぬ。けれどもとにかく自分たちが外に出て女中たちが内にいたということは、最初の震動の最中に自分の心を苦しめた。その時自分の体が震動のため思うように動かせなかったことが、いっそうその苦しみをひどくした（和辻 1963:589-590）。

二人の女中と下の子とを家の中に残して、反射的に家から外に逃げ出した自分の行動を振り返って、否定的に捉えていることがわかる。このような行動が、「自分の心を苦しめた」ことについて、和辻は続けて、次のように考察をしていくのである。

最初判断力が働かず反射的に外に飛び出したことがいわばフェータルなので、次の瞬間にそれを取り返

そうとしてももう間に合わぬのである。自分はすぐあとで藤田東湖の圧死を思い出した。東湖は母を救うために飛び込んで行って梁に打たれたのだという。おそらく彼もまた最初は反射的に外へ飛び出し、母のことに気づいて再び家の中へ飛び込んで行ったのであろう。もし揺れ始めの時ただちに母の居室にかけつけて行ったならば、救い出すひまがあったのであろう。が自分はこの「間に合わなかった」ことに、この際、強い同情を持つことができた（和辻 1963:590）。

安政の大地震の際、母を助けようとして圧死した藤田東湖の有名なエピソードにふれながら、藤田東湖も和辻と同様に最初は反射的に外へ飛び出し、再び家の中へ飛び込んで行ったのであろうと想像し、自分自身の行動と重ね合わせて理解しようとしている。「自分はこの『間に合わなかった』ことに、この際、強い同情を持つことができた」と述べるように和辻自身も藤田東湖と同じような行動を取っているが、結果的にはたまたま助かっているが、場合によっては、同じような目に遭って死んでいてもおかしくなく、強い同情を感じざるを得ないのである。そのうえで、和辻は次のように述べている。

ただほんの一瞬間、本能的な恐怖のために判断が麻痺する。次の瞬間には命を賭する気持ちになれるにしても、最初は思わず我を忘れて逃げる。そうしてその「我を忘れたこと」のためただちにその我が罰せられる。自分は今度の天災においてこの種の経験をした人が決して少なくないと思う（和辻 1963:590）。

「最初は思わず我を忘れて逃げる。そうしてその『我を忘れたこと』のためただちにその我が罰せられる」と述べているように、家族を残して、自分だけ逃げるという行動について、和辻が強く否定的に捉えていることがわかる。言い換えれば、「次の瞬間には命を賭する気持ちになれるにしても」と述べるように、命を賭けて家族を守ることを当然とする人間観を和

辻は持っているのである。これは藤田東湖の圧死を、強い同情を感じつつも、決して否定していないことからわかる。むしろ、反射的に逃げてしまったことを大きな罪と捉えて、たとえ助けに戻ったとしてもそれは当然の行動であり、遅きに失したために招いてしまった死もまた当然の罰として捉えられているのである。和辻が「自分の心を苦しめた」のも、守るべき家族を残して、反射的に自分だけ逃げてしまったことに対する罪の意識からなのである。

一般的に、防災の分野においては、災害時に危機に瀕して、人が逃げないことが問題となっている。その意味では、まず自分の身を守るために「逃げる」という行動をとったことは、むしろ和辻がいうように「我を忘れた」というよりも、適切な判断に基づいた適切な行動であったということもできるだろう。しかし、和辻にとっては、自分の命を犠牲にしても家族の命を守るための行動を取るのが、本来の「我」なのである。

以上のような議論を経て、和辻は次のようにまとめている。

人間の本性が利己的であると見る人は、本能的な恐怖に囚われる最初の瞬間を指示して、自説の証左とするであろう。しかし判断の麻痺した瞬間は、人間がその本性を失った瞬間である。次の瞬間にその本性を取り返したときには、もはや初めに恐れたものをも恐れなくなる。そうして利己的な欲望の代わりに、相互扶助の本能が猛然として働き始める。それは今度の天災で個人個人の間にも、あるいは一般に民衆的にも、また大阪神戸をはじめ全国の諸都市諸地方の団体的な救護活動にも、人を涙させるような同情の行為として一時に現われた現象だったと思う。ここで問題になるのはむしろたとい一瞬間でも本性を失うような狼狽に陥るといふ弱点である。そのような弱点のない、本当の意味で胆の据った人も、もちろんあったと思うが、しかし多数の人間にはこの弱点が共通であった。そのため災禍を甚しくした場合も決して少なくないと思う（和辻 1963:590）。

ここで和辻は、人間の本性の捉え方について、相反する二つのタイプを提示している。一つは人間の本性を利己的とするものである。和辻がもっとも嫌い、その生涯を通じて否定的に捉え続けてきたのは、利己的な行動であり、利己主義である。したがって、和辻は「判断の麻痺した瞬間は、人間がその本性を失った瞬間である」として、決して利己的な行動を人間の本性として認めない。一方、これに対して、「利己的な欲望の代わりに、相互扶助の本能が猛然として働き始める」という点について、和辻は人間の本性を認めようとする。「人を涙させるような同情の行為として一時に現われた現象」として、限定をつけてはいるものの、和辻はここに人間の本性を認めようとするのである。

地異印象記の末尾で、「公共の利益のために断乎として利己主義的な社会組織、経済組織を改善する機会を、天が日本人に与えた」のであり、「我々は相互扶助の精神に基づく最善の予防法を講ずべきである」と述べているのも、震災時に一時的に現れた人間の本性に基づいて、これをより恒常的なものにするために利己主義的な社会組織、経済組織の改善、最善の予防策を求めていると考えることができるだろう。

しかし、和辻自身が述べているように、問題なのは、「たとい一瞬間でも本性を失うような狼狽に陥るといふ弱点」であり、「多数の人間にはこの弱点が共通であった」という点である。人間の本性を利己的であると認めず、また利己的な行動について言葉の上では否定することはできても、そうした行動が利己的であると受け止められる可能性は残されたままであり、さらにそのような行動をもたらす、本性を失うような狼狽に陥るといふ弱点そのものは、如何ともしがたいものとして残されているのである。

もちろん、判断が麻痺し、人間がその本性を失った瞬間があったとしても、それは一瞬のことであり、その状態を乗り越えれば、相互扶助の本能が猛然として働き始める。相互扶助の本能が働く点についていえば、地震も台風も同様である。しかし、台風の場合、季節的に繰り返され、訪れる時期がわかっており、また近

づくにつれて、徐々に風雨が強まっていくことがわかるように、和辻がいうように、台風が突発的な性格をもつとはいっても、地震ほどには突発的に発生するわけではない。その意味で、台風は、事前から相互扶助的な行動を取りやすく、和辻にとっては、じつに人間の本性を発揮するに相応しい災害といえる。しかし、地震はまさに突発的に発生し、一瞬とはいえ人間の判断を麻痺させ、その本性を失わせる災害なのである。

和辻は、『風土』において、日本の家族関係において、利己心を犠牲にし、家族のために命を投げ出すことを価値とする「慈悲の道徳」が歴史的に形成されてきたことを説いていた。しかし、「慈悲の道徳」にとっては、一瞬とはいえ人間の判断を麻痺させ、その本性を失わせて利己的な行動を取らせてしまうことを取り上げて、そこに「地震的性格」を見出して言及することは、都合が悪いことは明白だろう。

利己心と犠牲という対立するテーマを取り上げる以上、犠牲に関しては、台風との関連から説くとしても、利己心に関しては、台風はふさわしくない。藤田東湖の圧死のエピソードにも端的にあらわれているように、地震との関連で説かれるべきものであろう。しかし、和辻は地震については一切ふれることなく、利己心を犠牲にする側面にのみ着目し、これを「台風の性格」と関係づけて論じているのである。しかしながら、以上見てきたように、『風土』は、地震について一切ふれていない点で、かえって関東大震災の経験がその論理構成に強く影響しているのではないかと推測されるのである。

4. 流言蜚語

和辻は地異印象記のなかで、大火の発生についても、同様の議論をしている。

このように人々は大異変の起こったことを最初に理解しなかったために、漸次大きい災害に巻き込まれていった。が、さらにもう一つ、それを手伝った不幸がある。それは地震におびやかされた人心が、最初に

抵抗力を失ったことである。地震後諸方に発火した、その火は時機が早ければある程度まで消せたのである。しかし人々は団結して消火に当たる代わりにただ逃げることを考えた。すでに地震が人心を「逃げる」方に押しつけていた。この抵抗力の喪失が、大火への無理解と相俟って、火事をますます大きくしていったように思われる。すなわち最初の逃げる気持ちの故に、遂には逃げられないような大火にしてしまったのだとも言える（和辻 1963:597）。

火事が大きくなってしまった原因として、和辻は「地震におびやかされた人心が、最初に抵抗力を失ったこと」に求めている。「地震が人心を『逃げる』方に押しつけていた」ことも、和辻の立場からすれば、「我を忘れる」という、地震がもたらした人間の弱点の現われにほかならないだろう。

一方で、震災時に発生した朝鮮人による放火の流言に翻弄された状況についても、和辻は克明に記録している。ところが、流言に対する人間の反応の捉え方は、これまでとは異なっているのである。

そういう不安な日の夕ぐれ近く、鮮人放火の流言が伝わって来た。我々はその真偽を確かめようとするよりも、いきなりそれに対する抵抗の衝動を感じた。これまでは抵抗しがたい天災の力に慄え戦っていたのであったが、このときに突如としてその心の態度が消極的から積極的へ移ったのである。自分は洋服に着換え靴をはいて身を堅めた。米と芋と子供のための菓子とを持ち出して、火事ときにはこれだけを持って明治神宮へ逃げろと言いつけた。日がくると急製の天幕のなかへ女子供を入れて、その外に木刀を持って張り番をした（和辻 1963:602）。

それまでは「天災の力に慄え戦いて」いた和辻は、朝鮮人の放火の流言を耳にするや、突如として「心の態度が消極的から積極的へ移った」とし、さらに木刀をもって見張り番をしたと述べている。これは地震に

対する恐怖から本性が麻痺した結果生み出された利己的な行動に対して、自ら見張り番をして、家族を守るという「慈悲の道德」の発現を示している箇所であり、藤田東湖のエピソードと同様に、利己心の犠牲のテーマが現れた箇所とみることができる。しかし、自然の猛威に対して相互扶助的に対応することと、朝鮮人の放火に備えて木刀をもって見張り番をすることとは、大きな違いがあるはずである。しかし、この点に関して、和辻がどのように考えていたのかはわからない。また和辻は、「自分は放火の流言に対してそれがあり得ないこととは思わなかった」と述べて、流言に関して何ら疑問をもたなかったことについて、一切、反省をしていないことも気になる。ただ、「震災前には、大地震と大火の可能を知らながら、ただ可能であるだけでは信じさせる力がなかった。震災後にはそれがいかに突飛なことでも、ただ可能でありさえすれば人を信じさせた」と、心の態度の変化を知的に説明するだけである。

昭和十二年（1937）に刊行された『倫理学』上巻では、関東大震災を例にして、和辻は次のように述べている。

かかる現象の巨大な例は関東大地震の際の関東地方であろう。あの際には既に無線電信による或程度の連絡があり、また交通による連絡も不可能ではなかった。然し通信や報道の常態的連絡は全然絶たれた。従って常態的存在においては関東の社会が一般の世間から切断せられた。のみならず関東地方の内部においても、局部局部がそれぞれに切断せられ、連絡ある空間は極めて狭く限局せられた。それは言い換えれば社会が一時的にバラバラになったということである。この間にあつただわすかに連絡の役目をつとめていたのは、無責任に口から口へと言い伝えられる「流言蜚語」であった。そうしてこの流言蜚語こそは、常態的な世間（すなわち連絡せられた空間）が失われていたことの、最も有力な証拠なのである（和辻 2007:239-240）。

和辻によれば、流言が広まってしまった理由は、「通信や報道の常態的連絡」がまったく絶たれてしまったせいであり、「社会が一時的にバラバラになった」からである。通信や報道による通常の正常な連絡によって、社会が成り立っている点を指摘している点は、現在に至る情報社会の発展を考えれば、非常に早い時期に行われた鋭い指摘ともいえる。しかし、流言を信じてしまった人間自身への反省は一切ないのである。

しかし、たとえそのような状況にあったとしても、流言を前にして立ち止まり、内容を吟味して真偽を確かめようと試みることは、人間にはそもそも不可能なのであるか。和辻は、流言をただそのまま機械的に信じてしまうだけの存在として人間を捉えているように見えるのである。

おそらく、自警団による朝鮮人の虐殺についても知っていたはずであるが、それについても一切言及はない。朝鮮人による放火の流言に対する態度からは、和辻の人間観には何か根本的な弱点があるように思われるのである。

5. おわりに

政治学者の荻部直によれば、関東大震災を契機として、「文化」による情報伝達網が失われ、「教養」による人格の陶冶とはおよそ無縁な状況下で、人々がごく当たり前に営利を離れ、互いに苦しみを救おうとしている「実践」を目の当たりして、和辻はそれまでの「人格主義」、つまり教養によって個々人が内面的向上をしていけば、社会の調和に至るという思想が打ち砕かれたという(荻部 2010:162-163)。関東大震災を契機として、後に和辻倫理学として展開される、人と人との間柄として人間存在を捉える「人間」の立場に転換していったと考えられるのである。

しかし、一瞬でも本性が失われてしまい、利己的な行動に出てしまうという、人間が抱えている「弱点」については、何ら解決されないまま残っていた。この弱点は、和辻の「人間」の立場を足元から危うくする。『風土』においては、地震に一切ふれられなかったよ

うに、この人間の弱点は隠されたままであった。では、『人間の学としての倫理学』から『倫理学』3巻に結実する「和辻倫理学」は、この「弱点」にどのように向き合い、これをどのように克服しようとしたのであろうか。あるいは『風土』と同様に、「弱点」に目をつぶったまま、その体系化に進んだのであろうか。

いずれにしても、このような関心からあらためて検討することによって、『風土』のみならず、和辻倫理学の全体の形成に関して、関東大震災が与えた影響を、詳しく明らかにすることができるだろう。さらには、関東大震災以後の思想状況を理解するうえでの手掛かりになるのではと考えられる。

しかし、この問題は本稿の課題を大きく超えている。今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 荻部直 (2011), 『光の領国 和辻哲郎』岩波現代文庫
- 2) 川本隆史 (1996) 「震災と倫理学に関するノート」中井久夫編『昨日のごとく—災厄の年の記録』みすず書房
- 3) 山折哲雄 (2011), 「解説」『天災と日本人 寺田寅彦隨筆選』角川ソフィア文庫
- 4) 和辻哲郎 (1979), 『風土』岩波文庫
- 5) 和辻哲郎 (2007), 『倫理学 (一)』岩波文庫
- 6) 和辻哲郎 (1963), 「地異印象記」『和辻哲郎著作集 第二十巻』岩波書店

【謝辞】本研究は東京大学地震研究所共同利用(2023-G-08)の援助を受けました。